

ほげい船 令和2年1月1日

—高知病院は不滅です。—

新年明けましておめでとうございます。新しい年を迎え職員の皆さんも気持ちも新たに令和2年を迎えたことと思います。今年の漢字2019は「令」になりました。新天皇即位による新元号決定が新たな時代の幕開けをつげた1年となりました。「令」という漢字一字が持つ明るい時代を願う国民の思いが集約されたことや「令和」は日本の古典からはじめて出典された元号であり、日本の伝統文化を再認識する機会となったことなどが選ばれた理由とされています。2019年厚労省は地域医療構想に沿って過剰とされる病床数の削減を踏まえ424公的病院名を公表し再編要請を行い、高知県でも5病院があげられています。国立病院機構でも全国で31病院、中国四国で7病院が公表されました。選考方法に問題があるといわれていますが、データに基づいており現実的にはこの方向で進んでいくことが想定されます。過剰病床の削減は国にとっても医療費抑制の観点から喫緊の課題です。高知病院も指名されるのではないかと心配しておりましたが、地域への貢献が認められ今回は大丈夫でした。地域医療構想による病床削減の試みは今回のみで終わるものではありません。病床削減のため病院評価は継続されて行われるものと思います。2019年は高知病院にとっては激動の年でした。3月には突然、放射線医師が退職、異動でいなくなり、診断医の確保に苦労しました。高知大学に非常勤の医師派遣をお願いし、個人的に知り合いの医師に依頼しなんとか1週間診断医が常駐している状態にすることができました。また、四国がんセンター経由で愛媛大学の読影の外部組織との関係を作りすべての症例について読影所見がつくようにして、放射線科の問題は解決しました。8月には麻酔科医師が2名退職し手術ができなくなるような状況になりました。徳島大学田中麻酔科教授にお願いして大きな協力を得ることができ、細木病院の堀見院長に相談にすると細木病院の医師を週1日派遣していただけるようになりました。加えて当然多額の費用が発生しましたがフリーランスのグループにもお願いしこの危機を乗り越えることができました。開院以来当院は医師派遣を高知大学、徳島大学に依頼しておりましたが最近どの診療科も医師確保が厳しく派遣できる人材がいなくて病院医師職員数の減少は止まりません。新臨床研修制度が大きく影響してきているようです。病院にとってのグッドニュースは徳島大学呼吸器膠原病内科西岡安彦教授が篠原先生転勤後空席になっていた臨床研究部部長を派遣してくれるようになったことです。今後も医師確保が病院運営上最も重要な課題となることは間違いなさそうです。2019年の流行語大賞はone teamでしたが高知病院も今まで以上にone teamとなり協力して病院を次の世代に引き継いでいかねばなりません。独立行政法人化となったあとも高知病院はつぶれることなく多額の負債を返済してまいりました。先山先生、福田先生はじめ有能な幹部がたくさんおりますのでこれからの高知病院の未来は明るいと思っております。長嶋選手の引退スピーチではありませんが我が高知病院は永久に不滅です。この3月に私も退官しますので今回のほげい船が私の原稿の最後となります。年4回発刊してきましたので、原稿を書く当番がすぐにまわってきておりました。いつも病院の状況を

考えながら職員の皆さんに高知病院の運営に積極的に参加してもらえるような内容で書いてきました。最後になりますが、高知病院の職員の皆様と、高知病院に更なる発展を祈念しております。本当に長い間多大なるご協力をいただき心より感謝申し上げます。